出展：「上州風　No２６」

（上毛新聞社、平成１９年３月）

イノシシとすみ分け。榛名山麓シシ土手

榛東・吉岡・渋川

榛東村の山林でシシ土手の調査をする自治研グループ「チームししどって」のメンバー。土手の幅約4㍍（最大4.5㍍）、高さは1㍍（1.5㍍）。高さは山側と谷側で異なる

「紅板締めとその復元」展 5月9日から高崎高島屋

たかさき紅の会による「紅絹の美―幻の染め『紅板締め』とその復元」が5月9日から14日まで、高崎高島屋で開かれる。時間は午前10時から午後7時。入場無料。問い合わせは同会の吉村さん（☎027・323・3541）へ。

昨年復元した新しい板だけを使おうということだったのですが、今では残っている古い板を全部使ってやってみようということになっています。新井さんも休日ごとに来てくださり、励ましてくれていますが「全部の柄を再現してみましょう」と、古い板が好きになってしまったんです。「この板、今ごろまた紅をかけられてびっくりしているよ」などと話しながら。

黒田　板を現役に戻したってことですか。板が現役に戻るということは技術も戻るということですよ。私たち研究者ははもったいないと思いますが、でも、染めが現在も行われていたなら、その板も当然使われていたわけですから。過去のものを現代に呼び戻してやったということです。

吉村　歴史民俗博物館に収蔵された板は桐の箱に収納されられ白手袋で扱います。全部調べるのに3年かかると、おっしゃっていた。じゃ、こっちは早く染めを復元しようと（笑い）。あの立派な資料に対抗できるのは唯一、使いこなすことなんだ。

黒田　やっぱり吉村染工場は生きている（笑い）。

吉村　赤い染料をかけてやると板は生き生きとしてくるんです。

黒田　私も最初の染めのときに見せてもらいましたが、そのときの染め上がりは多少不出来ではあったけれど、実際に模様が染め上げられたときの感動といったらありませんでしたね。

吉村　「できた！」とみんなで拍手しました。板締めの染めは、まったく同じ柄の凹凸のある2枚の型板の間に生絹を挟んで締め付け、その上から温めた赤い染料をひしゃくで掛ける。凹んだ部分に染料が流れ込んで染まり、布を締め付けている部分は真っ白な生地が残る。作業を続けていくうち、問題点がいくつも見つかってきます。締め具、さらに楔を使った旧型の締め枠、締め具合、染料の分量、布に何回染料をかけるか、染料の温度、紅絹に使う薄い生絹の材質、板と布の相性などなどです。「八枚に折りたる布を薄い糊を付けた板に挟む」とだけ書いてありました。さあ、どうするのかわからない。スルスル滑る絹の何という扱いにくさ。

黒田　間もなく、平成の紅板締めによる、かなりの精度の染めが完成することでしょう。そうしたらどうなさるのですか。

吉村　古い型板と、今回新たに彫った板とで、染めの再現作業を行っておりますが、7㌢染め上がると、かつて紅板締めが使われた間着が1着できるので、まず間着を仕立て、紅絹の美しさを皆さんに見てもらいたいと思います。また、ワークショップを開いて皆さんで板締めの面白さを体験していただきたいです。

黒田　「まあきれい」と思ってもらえることが大切ですね。紅絹の美しさがわかってもらえ再認識されれば、板締めによる量産は無理だとしても、現在の捺染により型板の柄をプリントすることは可能ですから、再びきものの間着などに使われるようになるかもしれません。そうなったらいいですね。きものをきることが、またひとつ楽しくなります。旧官営富岡製糸場がせっかく世界遺産リストに載ったのですから、そうした過去のものを大事にするだけではなく、現代によみがえった絹の技術も含めて考えていけたらいいと思います。

榛名山のシシ土手
イメージ図

杉木立の斜面に背骨のように盛り上がって見えるシシ土手の遺構。向うが榛名山側、手前が里側＝榛東村の山林